

ち疏主が、安慧であることは明かな事實で、上引諸書に所謂安慧の俱舍の釋に外ならぬことは疑無いと思ふが、更に之を前に見たやうに、本書の題名に既に悉地羅末提、唐に安惠という人が作つたと見え、また下に譯出する所に見える如く、疏主自からが、本書巻首の歸敬の偈の中に、自己の師瞿那末底即ち德慧に稽首すというて居ることなども、之を證據立てるものに外ならぬ。德慧と安慧との關係については、唯識論述記卷一に擧げた十六論師の條に、二梵云瞿字上聲拏末底、唐言德慧、安慧之師」と記されてある。かゝる次第であるから、自分は前に述べた如く、ロス氏が此の書に對して *Super-commentary on Sthiramati's commentary on the Abhidharmakośa of Vasubandhu* の名を與へたのには、今の所贊意を表し難い（但しこの殘卷中の一部分、例へば 001a の如きについては別の見方を要する所もある）。（第六項參照）

たゞ考へて見なければならぬことは、普光や窺基や乃至普寂等によつて、安慧に俱舍の釋の有つたことは、從來既に傳へられて居つたにしても、此等の所傳は、それが梵文で存することをいうたのか、或は漢文に譯出されたものがあつたのを指したのか、上に引いた文句では何れとも判然しなかつたと言はなければならぬが、本書がかくその原文を漢文に取つて、次に次第に述べる通り、極めて忠實に之を譯出して居るのに考へると、何時何人の手に依つてかは知り得ないが、兎も角も *Sthiramati* の書いた梵文の疏が、漢譯せられて存したものであることを明かに證明するものである。此の疏の作られた事情から見ても、また著者の佛教學上に於ける位置から見ても、此の書が俱舍論の研究家に取りては、甚だ重要な價值を有するものであらうと思はるゝに拘はらず、普光や窺基の後には、寡聞を以てすれば、大して之に注意した人があつたやうにも思はれないのみならず、その梵文のものも漢譯のもの